

「うしろむ」「かいまむ」「こころむ」活用考

小田 勝

○ 本稿の目的

- 1 我はなほ、人を思ひうしろむべけれど（紫日記・三二三）^①
- 2 立ち聞き、かいまむ人のけはひして（更級・四三）
- 3 便宜候はば、当家の浮沈をもこころむべしとこそ存じ候へ。
（平治・古活字本・大系・四〇六下）

右のような「うしろむ」「かいまむ」「こころむ」は、それぞれ、上一段動詞「みる」を後項にもつ「うしろみる」「かいまみる」「こころみる」が転じたものと考えられるが、その活用型や派生の経緯について、次のような問題が存する。

- ① 「うしろむ」の活用型について、四段・上二段・下二段の三説が行われているが、これをどのように考えるべきであろうか。

② 「かいまむ」は四段、「こころむ」は上二段とされるが、両者で活用型を異にするのは何故だろうか。

③ 「こころみる」（上二段）↓「こころむ」（上二段）のように転じたとするなら、「二段活用的一段化」という国語史上に広く起こった変化に逆行する現象といえるのではないだろうか。

本稿は、「みる」を後項にもつ動詞の転と考えられる、「うしろむ」「かいまむ」^②「こころむ」の活用型および派生の経緯についてその実態を調査し、もって辞書や索引等における不統一な取り扱いを正そうとするものである。

一 「かいまむ」

注1にあげた調査資料（以下これを「調査資料」と呼ぶ）から、

「かいまみる／かいまむ」の活用型について調査すると、表1のようである。³⁾

表1 かいまみる／かいまむ

	四確	二確	一確	未み	用み	命み	止む	名詞
竹取					1			
伊勢					2			
大和	1				1			
うつほ					1			○
落窪					1			○
枕								○
源氏								○
浜松					1			○
更級	1							
寝覚	1				1			○
狭衣								○
栄花	1							
今鏡					1			
篁					1			
とり	1							○
海道記			1					

「かいまみる／かいまむ」の用例は、4～6のように連用形「み」に集中して現れ、上一段「かいまみる」の確例は、『海道記』（一二三三年成立か）の7までみられない。

4 あなをくじりかいまみまどひあへり。(竹取・三才)

5 この男、かいまみてけり。(伊勢・一一一)

6 女、男の家に行きてかいまみけるを(伊勢・一四六)

7 おおづ將軍の貴居をかいま見れば(海道記・八二)
したがって、調査資料による限り、上一段「かいまみる」が「かいまむ」に先行して存在していたという証拠は得られない。しかし、語源が「垣間+見る」と考えられること、次節以降にみるように、同様の語構成をもつ「うしろみる」「こころみる」が「うしろむ」「こころむ」に先行して存在していることから、4～6のような例は上一段「かいまみる」の連用形と考えてよいものと思われる。ただし、『大和物語』では、次のように四段の確例とともに連用形「み」が現れ、

8 されかいまめば、我には良くて見えしかど(大和・三三二)

9 京より来たりける男のかいまみて見けるに(大和・三三五)

このような場合、9の活用型の判定は困難である。『大和物語』の索引では8・9ともに「かいまむ」で立項しているが、適切な取り扱いというべきだろう。同様に四段の確例(用例11)とともに連用

形「一み」が現れる『夜の寢覚』の索引でも同様の扱いをしている。調査資料によれば、四段「かいまむ」の確例は、『大和物語』の8を初見とし、以下、次のような例が認められる。^④

- 10 立ち聞き、かいまむ人のけはひして(更級・四三)
- 11 中納言の、君のしるべしてかいはませし日(寢覚・二五六)
- 12 かいはませ奉らばや(栄花・一四・一六)
- 13 とかくまぎれ寄りてかいまめば(とり・三三)

四段「かいまむ」の成立は、連用形「一み」を優勢な四段に用いたものとも、連用形転成名詞「かいまみ」を動詞化したものとも考えられ、直接的にどちらとも決定できないが、転成、名詞形を含む連用形「かいまみ」の圧倒的な使用頻度の多さ(逆に言えば四段動詞と異なる形の使用頻度の少なさ)が、四段化を促進させたのであろう。「こころみる／こころむ」の場合、調査資料の合計値は表2のようであって、四段動詞と異形の未然形「一み」が圧倒的に多く使用されており(命令形「一みよ」もよく用いられている)、このことが「こころみる」の四段化を阻んだと考えられる。

表2

	四確	二確	一確	未み	用み	命み	止む
	1	25	111	83	10		

表2にみるように「こころみる」の場合、二段活用と同形の活用形の使用頻度が高く、「かいまむ」が四段に、「こころむ」が上二段にと転じ方を異にするのは、両者の活用形の頻度分布の差が大きく影響したものと思われる。

二 「こころむ」

調査資料から「こころみる／こころむ」の活用型について調査すると、表3(稿末にあげる)のようである。^⑤「こころみる」は古来一貫して上二段の確例が存在しており、上二段・上二段同形の未然形「一み」、連用形「一み」、命令形「一みよ」も上二段の活用形と考えられる。四段か上二段の可能性のある終止形「一む」の確かな例も、調査資料中にはみえない。^⑥上二段「こころむ」は中世後期には活発に用いられるが、

14 Cocoromi, uru, ita. (日葡辞書)

15 サラバトテツトコ、ロムルズ(史記抄・八)^⑦

「こころむ」は漢文訓読語として平安時代後期に現れたようで、築島裕『訓点語彙集成』では、

「ココロム」(試)は本来「心見る」の意味の複合動詞で、上二段活用のはずであるが、平安時代後半から四段活用乃至は上

二段活用が生じたらしい。「由⁽²⁾」節⁽³⁾」含(食)⁽⁴⁾を自

試⁽¹⁾「二故」(大日経延久点二24)の例は多少疑義もあるが、

一往四段活用の例と見ておく。大日経疏康和五年点には

「試⁽¹⁾」涉⁽²⁾事⁽³⁾時⁽⁴⁾」(二37オ)の例がある。鎌倉期の無窮

会本・天理本大般若経音義では、「訓」「試」の字に「コ、ロム」

の訓を注してゐる。(第一卷五八頁)

と述べ、「自試⁽¹⁾」故⁽²⁾」(107/0004)、「試⁽¹⁾」時⁽⁴⁾」(11030006)、「

試⁽¹⁾」(11505521)、「試⁽¹⁾」(12005022)、「試⁽¹⁾」(12860001)

の例をあげている。調査資料中の上二段の確例、

16 此ノ馬ニ乘リ試⁽¹⁾ムルニ(今昔・卷一六・③四八二)

は訓点語の語法によるものである。上二段「こころむ」の例とし

て多くの辞書があげる古活字本『平治物語』の終止形「こころむ」

(用例3)は、陽明文庫本に、

17 便宜候はば、当家の浮沈をこころみ候はん事、本望にてこ

そ候へ。(新大系・一五四)

とあり、後世の語形が近世の版本に混入した疑いが強い。

上二段「こころむ」は、恐らく「こころみる」の古形と類推され

て漢文を訓読する際に用いられたのであろうが、稿末の表にみるよ

うに、南北朝時代までの文章(いわゆる古典文)に一般的に用い

られることはなかったようである。「こころむ」は、二段活用の一段

化の進行の中で、二段活用形が正當なものであるとの類推がその使

用を促進させたものと考えられ、連用形および名詞形「一み」の形

から優勢な四段に転じた「かいまむ」とは、その成立を異にするの

である。

「こころむ」が上二段化するにあたっては、前節に述べたように、

上二段「こころみる」の使用が上二段と同形である未然形「一み」

および連用形「一み」に集中している(調査資料中の全用例中、二

段・一段同形の活用形の割合が88%を占める)ことが大きく関与し

たであろう(すくなくとも二段化を抵抗なく促進させる要因になっ

たであろう)。また、「こころむ」の四段化を阻害したのも、四段と

異形である未然形「一み」の使用率の極端な多さだったといえるだ

らう。

三 「うしろむ」

調査資料から「うしろみる／うしろむ」の活用型について調査す

ると、表4のようである。

「うしろむ」も、「かいまむ」と同様、転成名詞形を含む連用形

「一み」の使用頻度の多さが、四段化を促進させたものと考えられ

る。「うしろむ」の場合、上二段「うしろみる」の確例が「うしろ

表4 うしろみる／うしろむ

																			四確
																			二確
																		1	一確
																			未み
																		5	用み
																			命み
																			止む
																			名詞
増鏡																			○
徒然		1																	○
とはず																			○
沙石集																			○
※																			○
とり																			○
今鏡																			○
大鏡																			○
栄花																			○
狭衣古																			○
狭衣																			○
寝覚																			○
浜松																			○
堤																			○
紫日記																			○
源氏																			○
枕																			○
落窪																			○
蜻蛉																			○
うっほ																			○

※||水鏡・宇治・たまき・保元・延平・長平・十訓抄(名詞形のみ○)

む」に先行しており、「うしろみる」と「うしろむ」の先後関係は疑いが無い。

「うしろむ」の活用型については、

「マ上一」の「後見る」を、「うしろむ」として「マ上二」のようにも用いた。(湯沢幸吉郎『文語文法詳説』昭34・右文書院・八〇頁。挙例は二例とともに「うしろむ」という終止形の例)

のように、古来上二段とする説があるが、調査資料による限り、上二段は確例に乏しく、「うしろむ」の活用は四段とすべきようである。なお、下二段とする説もあるが、根拠がない。従って、用例1のような終止形「うしろむ」は上二段ではなく、四段と考えるべきである。⑬ 四段の確例をあげる。

- 18 うしろむ人なども(源氏・玉鬘)
 - 19 この御方にあづかりて、思しうしろめとて(寝覚・五二)
 - 20 げにおぼろげに思ひうしろむ人のはかばかしき無くは(狭衣・卷一・古活字本・上二四)^⑭
 - 21 よろづ見うしろまるるはうれしともいふべきにやなれども(とはず・一四四ウ)^⑮
- 調査資料中、上二段の「うしろむ」は次の一例のみである。⑯
- 22 なま宮腹にてうしろむる人無からむよりは(狭衣・卷三・古

この例、深川本（第Ⅰ系統）は「後見人うしろみびとなからんよりは」（新全集・

②一五九）、内閣文庫本（第Ⅰ系統）は「後見る人うしろみのなからんよりは」（大系・三〇九）となっていて、本文存疑であるが、ほかに鎌

倉期の写本にも「うしろむる」の形をもつ本がある。すなわち、

- 23 A うしろむる人なからむよりは（伝為家筆本「巻三・四は第Ⅰ系統を主とした混態本文」・鎌倉時代中期頃写・一二二ウ）

B うしろむる人なからんよりハ（伝為明筆本「第Ⅱ系統」・

鎌倉末期〜南北朝初期写・一四九ウ）

C うしろむる人なからんちやうにてハ（伝慈鎮筆本「第Ⅲ系統」・鎌倉前期写・九八ウ）

のようである。ただし、23 Aは同じ第Ⅰ系統の深川本や内閣文庫本は上記、紅梅文庫本は「うしろみる人なからんよりは」（二〇五ウ）、Bは同じ第Ⅱ系統の飛鳥井雅章筆本は「うしろむる人なからんよりハ」（二四七オ）、Cは同じ第Ⅲ系統の保坂本は「うしろ見人なからんよりハ」（二二六ウ）となっているなど、同系内でも本文は揺れている。また、20も、鎌倉期の写本に「思ひうしろむる」となっているものが存する。

24 A 思ひうしろむるはかくしき人そ（伝為家筆本・六〇オ）

△同系統の伝為明筆本は「おもひうしろむる人の」（七七オ）、

飛鳥井雅章筆本は「思ひうしろむる人の」（八五オ）▽

B 思ひうしろむるはかくしき人そえてハ（伝慈鎮筆本・五二

オ）△伝清範本は「思ひうしろみはへる人なくハ」（八六ウ）▽

22〜24の本文は諸本間で激しく揺れているが、23・24は鎌倉期の写本であるので、中世前期には上二段「うしろむ」の形があったか、少なくとも上二段形を古い正当なものとする意識が（一部には）あったことがうかがえる。22〜24の形は、「こころむ」と同様の過剰修正の結果とみてよいだろう。近世には、誤った文語形として、上二段「うしろむ」が用いられる場合があった。井上文雄（一八〇〇〜一八七二）の家集『調鶴集』（新編国歌大観・九）に、

25 なに事もうしろむる子にかこつけてすべて心のままぞわりなき

などの例がある。

以上のことから、「うしろむ」の活用型は次のように考えられる。

①「うしろみる」は、「かいまみる」同様、転成名詞形を含む連用形「ーみ」の使用頻度が多く、平安時代に、優勢な四段活用形「うしろむ」が生じた。

②鎌倉時代には、「こころむ」同様、過剰修正の結果、上二段を古形とする意識が一部に生じた。

したがって、「うしろむ」の活用型は、四段活用と考えられるが、中世には上二段を古形と誤認し、写本中に上二段の形が用いられることもあった、と考えられるのである。^①

四 一段動詞の二段化について

「ころむ」は、二段活用の一段化という国語史上に広く起こった変化の中で、過剰修正 (hyper-correction)、すなわち二段活用を正統な古形であるとする意識が働いた結果、元来の一段動詞を二段活用に用いることによって生じたと考え、一部にみえる上二段「うしろむ」も同様の現象であると考えたが、ここで、なぜこのような過剰修正が他の一段動詞に生じなかったのか考えたい。

まず、注意すべきは、元来の一段動詞は、26のように、語形が極めて短い語がほとんどである、ということである。

- 26 着る・似る・煮る・干る・噓る・見る・射る・鋳る・居る・
率る／蹴る

二段活用は、未然形・連用形・命令形と終止形・連体形・已然形とで、「i-u」、「e-u」と母音を交替させるので、語形が短いと語の同定に困難が生じる。30のような短い語形が二段活用へ過剰修正されなかったのはそのためだろう。「ころむ」「うしろむ」

は一段動詞「見る」が名詞と複合したもので、この長さが語の同定を助けている。もう一つ重要なのは、「ころむ」「うしろむ」が単なる複合ではなく、「心十見る」「後ろ十みる」という原義から離れて、試行 (try)、世話・保護 (look after) という、これ以上分解できない一つの語義を表していることである。語義を単純に連続させた形の複合語では形態素間に切れ目が感じられやすく、後項は短い一段動詞のままという意識が残る。「かいまみる」に過剰修正が生じなかったのは、「垣間十見る」という語構成が見え易かったからであると思われる。すなわち、一段動詞が二段動詞に過剰修正されるには、次のことが必要である。

① 一段動詞 (26の語) を後項にもつ長い語形 (複合語) であること

と
② 単なる複合ではなく、一語として融合した語義を有すること
このように考えると、例えば、

27 こころみる・うしろみる・かんがみる・用ゐる (八持ち十率る)

に過剰修正 (二段形) が生じ、^②

28 かへりみる・かさね着る・起き居る・引き率る

などに過剰修正が起らなかったのも、不思議なことではないと思われる。

五 結論

以上、本稿では次のことを述べた。

- 一 「うしろむ」「かいまむ」は、一段動詞「うしろみる」「かいまみる」の連用形および名詞形「ーみ」の形から、優勢な四段に転じたもので、四段活用と認定されるものである。
- 二 「こころむ」は、南北朝時代までのいわゆる古典文には用いられず、古典文では一貫して一段動詞「こころみる」が用いられている。
- 三 「こころむ」は漢文訓読語として平安後期時代に現れ、中世後期になると活発に用いられた。この「こころむ」は上二段と認定されるものである。
- 四 上二段「こころむ」は、上一段「こころみる」の古い正当な形と類推されて生じたと考えられ、「うしろむ」「かいまむ」とは成立過程を異にする。
- 五 「うしろみる」「かいまみる」は四段と同形の活用形の使用率が高く、「こころみる」は上二段と同形の活用形の使用率が高い。そのことが、前者の四段化、後者の上二段化を抵抗なく促進させる要因になった。また「こころみる」の未然形

「ーみ」の使用率の極端な高さが、「こころみる」の四段化を阻害したと考えられる。

六 「うしろむ」は、中世には、「こころむ」同様、上二段が古い正当な形と類推され、古典文の写本等で上二段形が用いられることがあった、と考えられる。

注

(1) 用例の検索に用いた索引は次の通りである (M || 明治書院刊、B || 勉誠社 / 勉誠出版刊、無印 || 笠間書院刊)。挙例および所在の表示は索引の依拠本文による。傍線は、本稿で用いた略称を示す。

『竹取物語総索引』(武蔵野書院刊)、『伊勢物語総索引』(M)、
『上左日記総索引』(日本大学人文科学研究所刊)、『大和物語
彙索引』、『多武峯少将物語本文及び総索引』、『平中物語』
研究と索引(溪水社刊)、『うつほ物語の総合研究』(B)、『かげ
ろふ日記総索引』(風間書房刊)、『三宝絵詞自立語索引』、『落
窪物語総索引』(M)、『枕草子総索引』(右文書院刊)、『OD-
ROM 角川古典大観源氏物語』(角川書店刊)、『和泉式部日記
総索引』(武蔵野書院刊)、『紫式部日記語彙用例総索引』(B)、
『堤中納言物語総索引』(白帝社刊)、『浜松中納言物語総索引』

「未み」は未然形「―み」の形(上一段・上二段の可能性ある)、「用み」は連用形「―み」の形(四段・上一段・上二段の可能性ある)、「命みよ」は命令形「―みよ」の形(上一段・上二段の可能性ある)、「止む」は終止形「―む」の形(四段・上二段の可能性ある)を示す。

(4) なお、渡辺仁作『河内本源氏物語語彙の研究』(昭48・教育出版センター)によれば、『源氏物語』河内本・別本中に、次のような四段「かいまむ」の例がある。

・かいまませよとの給へは(空蟬・河内本・源氏物語大成・八九―8)

・かいはませたらむとき(末摘花・別本(御物本)・源氏物語大成・二二三―10)

(5) 『源氏物語』では、動詞(異なり語数)の内、約六割が四段活用、約三割が下二段活用で、両者で動詞の九割を占める(築島裕『平安時代語新論』昭44・東京大学出版会、四五七頁)。

梅沢本『栄花物語』では、四段活用が62%、下二段活用が27%(東辻保和『梅沢本栄花物語語彙の品詞別統計について』『講座平安文学論究』⑦・平2・風間書房)。

(6) 名詞を動詞化すると、一般に四段活用になる。「装束くハ装束、謀りこつハはかりこと、独りごつハひとりごと、政ごつハまつりごと、聖るハひじり、たてぶむハ立て文、酒盛るハ酒盛

り」など。

(7) 『今昔物語集』などは、送り仮名から活用型が明確に分かる用例に限った。

(8) したがって、『浜松中納言物語』や『大鏡』の索引に、未然形「こころみ」、連用形「こころみ」などを「こころむ」で立項しているが、これは上一段「こころみる」の活用形と考えるべきである。なお、義門『山口菜』に「こころみは八ちまた麻行中二段の活言のつらに出せり(中略)こころむると活きぬへく思はるゝ詞なれとむかしの物語ふみのたくひにこころみるとして一段の活のさまにのみいへるはいとおほかれと中二段なるそとおもはるゝはいまた一も見あたらず」(中27ウ)とある。

(9) 『邦訳日葡辞書』Cocoroniの項の注による。

(10) 括弧内の数字は訓点資料番号で、はじめの4桁が加元年(下4桁が300番台の資料は大凡の加元年)を示す。

(11) 『日本国語大辞典』第二版、『角川古語大辞典』、『小学館古語大辞典』をはじめ、多くの古語辞典がこの例(≡用例3)をあげる。

(12) 金刀比羅本(大系)にはこの箇所が存しない。

(13) したがって、『小学館古語大辞典』「かいまむ」の語誌欄の記述「こころみる」から「こころむ」が成立した場合と、事情が同じであろう、『日本国語大辞典』第二版「かいまむ」の

語誌欄の記述「例えば「こころみる」と「こころむ」の場合のように、上一段がまずあって、後に四段が成立してくる関係から類推して」（傍線引用者）は、ともに正しい記述とはいえない。

(14) 『日本国語大辞典「第二版」』「こころむ」の語誌欄の記述「活用形の中で最も使用頻度の高い連用形「こころみ」が上一段活用と同一であったために、より優勢であった上二段に類推された結果であるとも考えられる」（傍線引用者）は、一般論としては必ずしも誤りではないが、「こころみる」の場合、未然形の高頻度が大きな要因になっていると思う。

(15) 『三省堂全訳読解古語辞典』「うしろむ」の参考欄に「下二段活用の語ともいわれる」とし、『狭衣物語彙索引』には、終止形「うしろむ」を「うしろむ〔後〕（下二段）」として掲出する。

(16) 終止形「うしろむ」の用例を上二段としてあげる古語辞典に『岩波古語辞典「補訂版」』、『旺文社古語辞典「第十版」』、『旺文社全訳古語辞典「第三版」』、『三省堂詳説古語辞典』があるが、改めるべきかと思う。なお、注21も参照。

(17) 『古活字本狭衣物語総索引』に、この「思ひうしろむ」は古活字本では「おもひうしろむる」である旨の注記があるが、朝日古典全書が底本とする元和九年木活字版の影印（古典資料類

従）で確認したところ「思ひうしろむ人の」になっている（巻一下・六オ）。承応三年版本（有朋堂文庫）も同じ。

(18) 『』とはずがたり』の索引に「みうしろむ（見後）」（四）で立項し、拙著『古典文法詳説』（平22・おうふう・五三頁）でも、「見後ろむ」という語形をあげて「不思議な語形」としたが、ここは、「よろづ見、うしろまるるは」と読まれるべきものであるので、ここに拙著の記述を訂正する。

(19) この例、「うしろむ」上二段説の根拠になったようで、本居春庭『詞八衢』の「麻行」の「中二段の活詞」でも「狭衣にうしろむる人なからんよりはとありうしろみといへるはおほし」（下29ウ）として、この例をあげている。

(20) 『狭衣物語諸本集成』による（24も同じ）。諸本の系統は新全集解説による。

(21) 拙著『古典文法詳説』（平22・おうふう）の五三頁で、「後ろむべきことなど（大鏡）」をあげ、「後ろ見」を上二段に活用させた語で、平安後期に現れました。」と記したが、ここにこの記述を訂正する。

(22) 「用ある」は中世にハ行上二段「もちふ」、ヤ行上二段「もちゆ」として用いられることがあり、「かんがみる」は近代の文語で上二段「かんがむ」の形で用いられることがある。

表3 ころもる／ころむ

	四確	二確	一確	未み	用み	命みよ	止む	名詞
竹取				1				
うつほ			2	10	7	1		○
蜻蛉			5	8	1			○
三宝絵			2	2	2			
枕			1		1			○
源氏			2	10	18	1		○
和泉日				1	1			○
紫日記			1	1				○
堤				2				
浜松			1	2	1			○
更級						1		
寝覚			3	2	1			
狭衣				5	2	1		○
狭衣古				8	4			
栄花				3	2			○
讃岐				5	1			
今昔		1			6	2		
古本説			1					
大鏡				1	2			○
今鏡				1				○
宝物集				2				○
篁								○
とり				2	1			○
松浦			1		3			○
宇治			1	13	8	2		○
発心集				5	1			
保元				2				○
平家								○
延平				1	1			○
長平				2	1			○
十訓抄				4	3			○
著聞集			2	6	8	1		○
唐物語			1	1				
こわた				2				
沙石集				3	1			
とはず					1	1		○
徒然				2	1			
太平記				1	4			
増鏡				2	1			○
曾我			2	1				